

『韓国語教育研究』(第6号) 別刷

ISSN 2186-2044

【研究論文】

/ㄷ/が連続する際に生じる日本人韓国語学習者の誤用と
教師の対応法

兪 三善

日本韓国語教育学会

2016年9月

/ㄷ/が連続する際に生じる日本人韓国語学習者の誤用と 教師の対応法

兪 三善

本稿は、/ㄷ/が連続する際に生じる子音/ㄷ/の脱落または母音の挿入という問題を取り上げ、原因究明とその対応法を試みたものである。これらの誤用は、(1) 韓国語の構造と (2) 日本語の干渉に起因していたが、(2) よりも (1) が原因で起こる誤用が多かった。韓国語の構造による誤用は、主に①ㄷ語幹用言の活用規則の過剰一般化、②ㄹ変則用言の해요体の誤形成、③連音化規則の過剰一般化、④調音の持続時間の短縮、⑤流音化の未形成であった。日本語の干渉による誤用は、①母音の挿入と②外来語における終声/ㄷ/の脱落で、これらは、子音の連続を避け、間に母音を挿入して読むという日本人の言語習慣と、日本語の外来語の読み方を韓国語の外来語に持ち込むということに起因していた。そして、誤用の弊害としては、特に韓国語の構造による誤用が意味理解に支障をきたすというものであった。以上の結果を踏まえて、誤用への対応法を提示した。

1. はじめに

筆者が担当する年齢・性別・学習歴が異なる4つの教育現場、Yahoo!知恵袋、Yahoo!ブログ (cf.脱韓国燃え尽き症 {2012/12/02}) から、下記のような/ㄷ/が連続する際の発音に苦勞する学習者がいることがわかる。

달라요 / 놀리다 / 블로그 / 블래요 / 빨리 / 몰래

学習者にとっては、これらの/ㄷ/が連続する言葉の正確な発音は難しいようである。たとえば、「달라요」[dallayo]の場合、多くの学習者は「다라요」[darayo]ないし「달아요」[dalayo]、あるいは、「다르래요」[dareurayo]と発音してしまう。つまり、①第一音節の終声の/ㄷ/を落として「다라요」[darayo]と発音するか、②第

二音節の初声の/ㄷ/を落として「달아요」[dalayo]と読むか、③第一音節と第二音節の間に母音の/ㅛ/を挿入して「다르라요」[dareurayo]と発音するか、いずれかである。すなわち、終声または初声の子音/ㄷ/の脱落、もしくは母音の挿入という音声的誤用（エラー）が起きているのである。母音の挿入には、/ㅛ/以外に/ㅜ//ㅝ//ㅞ//ㅟ/が入っている場合もある。では、なぜ、これらの誤用が起こるのであるのか。

外国語習得において、母語の影響はさまざまな側面に現れるが、その影響が最も顕著なのは音声の習得であることが指摘され、誤用も母語の干渉から説明されることが多い（松崎 1999{p.27};戸田 2003{p.70};西川 2005{pp.695-696}）。確かに本稿の問題の一部もこれで説明できるものもある。

だが、子音/ㄷ/の脱落という現象は、そう簡単には説明できない。そこで、韓国語教育の授業中に観察された誤用例¹（76例）や『연세 한국어사전』（1999年）から収集した/ㄷ/が連続する語²（631語）の内部構造の分析の結果をもとに、音声習得を調査していくと、母語（日本語）の干渉以外に韓国語の構造が、学習者の音声習得に影響を与えていることが見えてきた。

本稿では、論点を単純化すべく、/ㄷ/が連続する際の誤用を、①韓国語の構造に起因するもの、②日本語の干渉に起因するものに分けて、検証していく。また、本稿の問題を分析する上で、日本語教育における言語習得に関わる知見も踏まえたいと思う。

本稿の手順は、次の通りである。次節では、近年の研究成果を概観する。続く第3節では、誤用の観察の場となった教育現場を紹介する。第4節では、/ㄷ/が連続する言葉の特性を提示する。これらは第5節と第6節の議論の前提となる。第5節では、韓国語の構造に起因する誤用を検証し、第6節では、日本語の干渉に起因する誤用を取り上げる。第7節では、誤用の弊害とその対応法について記す。最後の第8節では総括する。

なお、本稿のローマ字表記は、韓国文化観光部 2000年式（국어의 로마자 표기법{国語のローマ字表記表}）に従う。また、紙幅の都合上、提示する単語ごと

¹ 誤用例は、4年余りにわたって3節の表1に示した学習者たちによる/ㄷ/が連続する言葉（教材中のダイアログや練習問題に現れるもの）における音声的な誤用を明示的フィードバックの後、記録したものである。対象者数は平均して50名である。誤用例と辞書の語数はそれぞれ異なり語数である。

² 見出し語を全部調べた。

のローマ字の表記は省略する。

2. 先行研究

管見の限りでは、韓国語の/ㄹ/が連続する際の音声的誤用を扱った先行研究は確認されなかった。ここでは、本稿で扱う問題と関連が深い、終声/ㄹ/の発音と/ㄹ/が連続する際の発音の指導法を紹介し、議論の出発点とする。

先行研究において、終声/ㄹ/の発音を単独で取り上げた文献は見当たらなかったが、趙 (2007 {pp.380-381}) は文字と発音の指導法を提示する中で、終声/ㄹ/の調音法を示し、野間 (2007 {pp.250-251}) は韓国語教育に必要な音声学の概説をする中で、終声/ㄹ/の調音法、/ㄹ/が連続する際の調音法を示している。野間 (2007) の解説が最も本稿の問題に近いので、ここに引用する。

/레일[reil (レール)]のように、/ㄹ/は音節の頭では[r]音で現れるが、音節末では[l]音で現れる。rの系列の音とlの系列の音を合わせて流音 (liquid/유음) という。音節の頭の/ㄹ/は日本語のラ行音でほぼ問題ないが、音節末の[l]は日本語母語話者には厄介である。

[l]は歯茎音に用いることが多いが、韓国語では歯茎音ではなく、さらに奥の硬口蓋につく。有声硬口蓋側面接近音[l̪]もしくは、舌の先を奥に反らせて硬口蓋につける、有声反り舌側面接近音[l̠]である。—中略—

調音上の要点は舌が硬口蓋にぴったり密着するという点である。舌を密着させることの確認法としては、발[pal]と発音した直後に、舌を動かさず、息を吸ってみる。もし舌がぴったり密着していれば、舌の両脇が涼しく感じるし、舌が離れていれば、舌先まで風があたって涼しく感じる。また、密着させる位置を確認するには、舌を上の前歯の裏につけ、順に口の“天井”をこすりあげる、つまり歯茎、硬口蓋、軟口蓋と、舌を離すことなく動かしながら、声を出す。これらがいわば、全て[l]音のヴァリエーションである。次に舌を歯につけたとき、歯茎につけたとき、硬口蓋につけたとき、軟口蓋につけたときという具合に、それぞれ別々に声をつけて発音してみると、軽く明るい音から、音がどんどん暗くなってゆくのがわかるだろう。舌をつけるということの意味を、学習者はこうして体験するのがよい。

以上が終声の/ㄷ/の音声の作り方である。そして、/ㄷ/が連続する際の発音については、次のように教える。

終声の/ㄷ/は발달[pal:al] (浣刺) のように、初声の/ㄷ/と結合すると、[l]の長子音[l:]となる。要するに硬口蓋につける持続時間が長い[l] になるわけである。教育上は長子音の表記はなじまないで、[palla]のように2つの[l]を書くのが一般的である。これに引かれてか、[pal.ral]のごとく舌を離してしまう学習者がままた見える。持続時間が長い子音という概念を理解するためには、例えば엄마[omma] (ママ) の[m]を想起すればよい。唇を離さず、閉じている時間が長い子音[om:a]というわけである。

詳細な終声/ㄷ/、また/ㄷ/が連続する際の調音点と調音法の解説である。

さて、教育現場では、上記のようなモデル発音を指導しているにもかかわらず、本稿で取り上げるような誤用は多い。しかも、上級過程や超級過程の学習者さえ誤用を繰り返す。なぜ、正しい音声習得ができないのか、何が音声習得を阻害しているかを改めて検証し、その知見にもとづいて、教師のモデル発音をより効果的に模倣でき、かつ、正しい発音を維持できるように対応を示したいと思う。

3. 誤用の観察の場となった教育現場

まず、観察の対象者の構成と人数、また学習者レベルが誤用の実態を見る上で必要と考えられるので、筆者が関わっている教育現場を紹介する。次の表1に示したとおりである。

表1(2016年 現在)

教育現場	対象者	人数	学習時間(週)	筆者との学習期間
①4年制大学 (基礎教育科目・自由科目)	1年次	少人数制 12名	80分×1回 40分×1回	半年
	2年次	少人数制 7名	同上	2年 継続者中心
	・3年次 ・4年次	少人数制 6名	同上	3年 継続者中心
②大学内の生涯学習センター	初級	17名	1時間30分	1年
	中級	15名	1時間30分	3年
③居住地の市民サークル	上級	11名	1時間30分	14年
④個人レッスン	・中級	1名	1時間	2年
	・超級	1名	1時間30分	14年

- I) 教育現場は、4年制大学、その大学内の生涯学習センター、筆者の居住地の市民サークル（以下では、市民サークルと称する）、個人レッスンという四つの場である。
- II) 対象者数は現在70名ほどである。その内訳は、大学生が合わせて25名、生涯学習センターが32名、市民サークルが11名ほど、個人レッスンが2名（アメリカ人と日本人）である。なお、大学の学部の講座は少人数制で、基礎教育科目・自由科目である。2年次以降からの途中受講は不可であり、4年次は韓国への一年間の留学経験者を含む。
- III) 週当たりの学習時間は、大学生が2時間、大学内の生涯学習センターと市民サークルの社会人は1時間30分である。
- IV) 筆者との学習期間は、最短6か月から最長14年ほどである。

以上のような学習者の年齢や性別（ほぼ4 {女} 対1 {男}）、また、学習時間および学習歴が異なる教育現場において、共通に/ㄷ/が連続する際に子音/ㄷ/の脱落または母音の挿入という現象が起きているのである。ちなみに、各講座で使用している韓国語教材は、『基礎から学ぶ韓国語講座初級（改訂版）』（木内明、国書刊行会）、『基礎から学ぶ韓国語講座中級（改訂版）』（木内明、国書刊行会）、『できる韓国語初級Ⅰ（改訂版）』（李志暎他、DEKIRU 出版）、『できる韓国語初級Ⅱ（改訂版）』（李志暎他、DEKIRU 出版）、『New 가나다 KOREAN for Japanese・中級Ⅰ』（한글과크）、朝鮮日報（※）³などである。

4. /ㄷ/が連続する言葉の特性

『연세 한국어사전』から収集した/ㄷ/が連続する言葉には、下記の表2の①から④までのものがあつた⁴。語数は合計631語で、さらに135種類（縮約形も含まれる）ほどの接続・終結語尾など（現代語）を得ることができた。

表2

内訳	語数	例語
①/ㄷ/が連続する用言・名詞・副詞	258語	갈라놓다/탈락/빨리/콜라
②ㄹ変則の活用をする用言	87語	게으르다/모르다/흐르다
③流音化する用言・名詞	286語	곤란하다/신랑/한류
④助詞、接続・終結語尾	135種類ほど	-로/-러/-라니까/-래요

この表を一見しただけで、学習者にとって、/ㄷ/が連続する際の音声習得が如何にハードルの高いものであるかが見えてきたと思われる。具体的には、①は元々/ㄷ/

³ ※印をつけた教材は誤用例の収集の対象外である。

⁴ 辞書から/ㄷ/が連続する言葉を調べた理由は、まず、今までに、/ㄷ/が連続する言葉の語数と語の構造を知るデータがなかったためである。もう一つは、誤用例の語の構造を表2と同様に分析した結果、③の例が少ないことと、/ㄷ/の連続に関与する④の状況も把握する必要があつたからである。また、より多くの言葉をもって、7節の表6に示した終声/ㄷ/の脱落による弊害を確かめる必要があつたからである。

の連続を含む単語である。外来語もここに含まれる。②は해요体（非格式丁寧体）に活用されると、/ㄷ/が連続するようになる。このㄷ変則用言の活用が本稿で扱う音声的誤用の中心的なものである。続く③は流音化というもので、表記上では/ㄷ/が連続しないが、発音の際、音声変化を起こして、/ㄷ/が連続することになる。文字と発音のズレが大きいものである。④のうちの「-로」は終声/ㄷ/を持つ名詞、その他の接続・終結語尾はㄷ語幹用言をはじめ、種々の用言に接続され、/ㄷ/が連続する言葉を数多く作り出す。すなわち、/ㄷ/の連続には、元々/ㄷ/が連続する単語（①）の他に、他の語との接続や活用によるもの（②、④）、発音の変化の規則によるもの（③）がある。

以上のように、この/ㄷ/が連続する言葉は、調査が示すように数が極めて多く、また、日常言語生活において使用頻度も高いものである。それだけに、学習者の誤用に触れる機会が多く、誤用も目立ってしまう。

私たち韓国語教育に携わる者は、/ㄷ/が連続する際の対応において、このような状況をよく把握しておく必要がある。そして、学習者が/ㄷ/が連続する音声を混乱することなく習得できるように、支援と指導をしていくことが求められている。

上記の調査において、調査対象外とした事柄について付言する。①の項目では、第一音節の終声「ㄷ」に第二音の初声「ㄷ」が来る用言・名詞・副詞が中心となっており、「재빨리」のような第二音節の終声「ㄷ」に第三音節の初声「ㄷ」が来るものは含まれていない。また、③では「칼날」のような終声「ㄷ」に初声「ㄷ」が来る語（/ㄷ//ㄷ/→/ㄷ//ㄷ/となる）は数えていない。本稿では、教育現場で収集した誤用例（76例）に加えて、辞書から拾い上げた/ㄷ/が連続する言葉 631語と 135種類ほどの終結語尾などを対象にしたが、本稿で扱う音声的誤用の実態の分析にはそれで充分だと判断したからである。

それでは、ここから先は、本稿の本論に当たる、/ㄷ/が連続する際の子音/ㄷ/の脱落と母音の挿入の原因を検証していきたい。その際には、前述したとおり、①韓国語の構造に起因するもの、②日本語の干渉に起因するものに分けて、検討する。まず、①から論証する。

5. 韓国語の構造に起因する誤用とその原因

韓国語の構造に起因する誤用の多くは、下記の子音/ㄷ/の脱落によるものである。文字に付した下線は/ㄷ/が脱落した部分を示すものである。また、右側の（ ）の中の表記は正用である。以下同様。

子音/ㄷ/の脱落の例

A. 終声/ㄷ/の脱落

- 시례합니다 (실례합니다 : 失礼します)
- 다라요 (달라요 : 違います)
- 모라요 (몰라요 : わかりません・知りません)
- 조려요 (졸려요 : 眠い)
- 부러요 (불러요 : 呼びます・歌います・いっぱいです)
- 빨리 (빨리 : 速く)
- 놀러오세요 (놀러오세요 : 遊びに来てください)
- 한국말로 (한국말로 : 韓国語で)

B. 初声/ㄷ/の脱落

- 실예합니다 (실례합니다 : 失礼します)
- 서틀어요 (서틀러요 : 下手です)
- 헛갈어요 (헛갈려요 : 紛らわしい)
- 마실어요 (마실래요 : 飲みます)
- 빨아요 (빨라요 : 速いです)

AとBの誤用は、韓国語教育に携わっている者なら、一度ぐらいいは耳にしていると思われる。ご覧のとおり、終声/ㄷ/または初声/ㄷ/が脱落する誤用が起きている。そのうちの終声/ㄷ/の脱落は、上記の表1の学習歴4年前後、つまり中級課程までの(ケースによっては上級過程さえも)学習者が繰り返す誤用である。初声/ㄷ/の脱落は、表1の①一年留学帰還者や③/④の学習者に観察されるものである。7節で述べる誤用の弊害の大きさから考えると、初声/ㄷ/が脱落

した誤用よりも終声/ㄷ/が脱落した誤用の方が指導する際に特に注意が必要である。

ところで、韓国語に限らず言語の習得において、学習者が音声の脱落を起こすことは、それほど特殊なことではないように思われる⁵。だが、問題は、なぜ、学習者がこのように間違ってしまうのかということである。その疑問に答えるべく、授業中に観察された誤用のパターンを分析し、その結果と前述の/ㄷ/が連続する言葉の特性との関連を検討した。まず、誤用の分析においては、主に、

(1) 本来あるべきところの/ㄷ/が脱落していると判断されるパターン、(2) 活用の際に/ㄷ/を付加し忘れていると思われるパターン、(3) 発音の変化に対応できなかったと考えられるパターンがあった。この三つのパターンを、上記の表 2 の/ㄷ/が連続する言葉の項目に重ね合わせてみると、(1) と①が、(2) と②・④ (文法レベル) が、(3) と③ (音声レベル) がほぼ重なり合った。

学習者が、共通に/ㄷ/を脱落させているということは、潜在的な何かが、/ㄷ/の脱落へ学習者を導いているとも言える。既習の何かが学習者を混乱させている可能性が高い。

よく知られている事柄ではあるが、韓国語の学習には「ㄷを消す」(ㄷ語幹用言)と「ㄷを足す」(ㄷ変則用言)という2つの相反する重要な学習事項がある。この相反する学習事項に起因する混乱が子音/ㄷ/の脱落に関与しているものと思われる。

以上のことを踏まえて、本稿で取り上げる誤用、つまり、子音/ㄷ/の脱落の原因として、主に①ㄷ語幹用言の活用規則の過剰一般化、②ㄷ変則用言의 ㅅ 体の誤形成、③連音化規則の過剰一般化、④調音の持続時間の短縮、⑤流音化の未形成という5つの要因を導き出した。過剰一般化とは、過剰般化とも言い、すでに習った文法規則や意味的特徴を他の場合にも過剰に適用してしまうことである (迫田 2005 {p.700} ; 橋本 2006 {p.108})。次項からは、これらの五つの点を中心に論を進める。以下では、用語の混同を避けるべく「ㄷ語幹用言の活

⁵ 例えば、日本語学習では特殊拍の習得において、母語に関わらず特殊拍の脱落や挿入が起こっていること (cf. 戸田 2003 {p.70}) や、韓国語母語話者が日本語の語中の/h/を弱化・脱落させること (例: ふうふ {夫婦} →ふうう、おふくろ→おうくろ) などが知られている (cf. 松崎 1999 {p.27}) 。

用の規則」における/ㄷ/は、片仮名でリウルと記す。

5.1 リウル語幹用言の活用規則の過剰一般化による誤用

ここで言う「リウル語幹用言」とは、文字通り、語幹がリウルで終わっている用言（動詞・形容詞）を言い、語幹の部分のリウル語幹という。そして、この語幹の活用において問題となるところは、下記の表3のような表現において、特定の語尾や形態素と結びつく際にリウルが消失してしまうことである。살다（暮らす・生きる）を用いて、変則的な活用の一部を示してみる。

表3

内訳	語幹		特定の語尾・形態素	活用形
	通常	変則活用時		
①丁寧体	살	사	—ㅂ니다	삽니다
	살	사	—오	사오
②敬語	살	사	—세요	사세요
	살	사	—십시오	사십시오
③連体形	살	사	—ㄴ	산 (過去)
	살	사	—는	사는 (現在)
④その他 ⁶	살	사	—네요	사네요
	살	사	—니까	사니까

このように、リウル用言語幹は、語尾「—ㅂ니다/—세요/—오」や「—네요/—니까」のように「ㄴ」で始まる語尾、あるいは連体形を作る形態素「ㄴ (過去)」「는 (現在)」が付加されると、表記においても、音声においても、リウルは完全に脱落してしまう。このリウルの完全消滅のルールは学習者の脳裏にずっとインプットされていく。この用言の学習は、たとえば、前述した『基礎から学ぶ韓国語講座初級』の場合、第7課という初歩の段階から始まり、こ

⁶ 他に、—니/—느냐/—냐/—느라고/—느니などもある。

の語幹の敬語、連体形の文型が中級課程まで次々と提示されていく。学習者は、このリウル消失のルールに繰り返し直面することにより、いつの間にか、リウルは「消えるもの」「消さないといけないもの」としてのイメージが定着していく。その結果、一部の学習者において、リウル語幹用言におけるリウル消失の規則が、意識的、もしくは無意識のうちに、それ以外の/ㄷ/が連続する場面に持ち込まれ、終声/ㄷ/の脱落を誘発したものと思われる。

5.2 ㄹ変則用言の해요体の誤形成による誤用

では、2つ目の終声/ㄷ/の脱落の要因であるㄹ変則用言の해요体の誤形成（活用の誤り）について検証する。ㄹ変則用言とは、下記の表4のⅠのように語幹末にㄹ音節が入っている用言が、해요体となる際に変則活用をするものである。

表4

基本形	Ⅰ. 語幹	Ⅱ. 해요体 (正用)	Ⅲ. ㄹ変則の誤形成 (表記と音声)
① 마르다	마르	말라요	마라요
② 모르다	모르	몰라요	모라요
③ 부르다	부르	불러요	부러요
④ 흐르다	흐르	흘러요	히려요

これらの語幹末にㄹ音節が来る語に、해요体の形態素を付加する際は、語幹の母音によって、2つのタイプに分かれ、それぞれ異なるパターンで変化する。活用の説明は、前述の『できる韓国語初級Ⅱ』に沿って行う。①と②のようにㄹの前の音節の母音が「ㅏ」か「ㅑ」（陽母音）の場合は、まず、語幹ㄹの母音「ㅡ」を取って「아요」を付ける。その後、さらに第一音節にリウルを添加して活用を終了させる。例として、①「마르다」に適用してみると、まず、語幹「마르」の母音「ㅡ」を取って「아요」を付けて「마라요」を作る。その後、「마라요」の第一音節「마」にリウルを添加し、「말라요」とする。これで活用が終了し、해요体が成立する。一方、③と④のようなㄹの前の音節の母音が「ㅓ」や「ㅕ」（陰母音）の場合は、

まず、語幹「르」の母音「ㅡ」を取って「어요」を付ける。その後、第一音節にリウルを付加し、活用を終了する。③を実例とすると、「부르」の母音「ㅡ」を取って「어요」を付けて「부러요」を作る。その後、「부러요」の第一音節「부」にリウルを付加し、「불러요」とする。それで活用は終了する。

以上のプロセスを経て、本稿の研究対象の/ㄷ/が連続する言葉となる。この活用の最大の難点は、終声/ㄷ/を添加するということである。ここで、一部の学習者は混乱し始める。何故ならば、今までの終声/ㄷ/に対する情報、つまり、/ㄷ/は「消えるもの」「消さないといけないもの」という認識を、変えざるを得なくなったからである。このためであろうか、それとも学習後に「ㄷ」を添加するルールを忘れてしまうのか、学習者の多くが、上記の表4のⅢのように「ㄷ」を添加しないという間違いをする。これがㄷ変則の誤形成であり、音声上の誤用として現れてくる。

5.3 連音化の過剰一般化による誤用

また、ㄷ変則用言のㄱㅇ体においては、以上のような単純な活用の誤りによる誤用以外に、連音化の過剰一般化が関係して起きる誤用がある。ここで問題となる連音化とは、終声に母音が続くと、その終声はそれに続く母音とともに発音されることである。また、終声が二つである場合は、右側の子音がそれに続く母音とともに発音される。具体的には、下記の下線部のように、終声/ㄷ/が初声の/ㅇ/と結合すると、/ㄷ/は次の/ㅇ/の音節に移る。このリウル語幹の連音化が、本稿で取り上げる誤用の引き金となる。

달ㄷ아ㅇ요⇒⇒⇒다ㄷ라ㅇ요 (実際の発音) /불ㄷ어ㅇ요⇒⇒⇒부ㄷ러ㅇ요 (実際の発音)

この連音化は、終声の発音の負担を軽減する法則で、初歩の段階で発音指導に取り入れている。学習者がせっかく習得した発音法則が、本稿の/ㄷ/が連続する音声の習得に悪影響を与えているとは皮肉である。

この連音化の影響は、/ㄷ/が連続するㄷ変則用言のㄱㅇ体の音声に顕著に現れる。次の三つのペアを見比べていただきたい。

a) 달아요/darayo/ (連音化した実際の発音「**다**라요」/darayo/ ;
달다の해요体)

a-1) 달라요/dallayo/ (音声的誤用の発音「**다**라요」/darayo/ ;
다르다の해요体)

b) 물아요/morayo/ (連音化した実際の発音「**모**라요」/morayo/ ;
물다の해요体)

b-1) 물라요/mollayo/ (音声的誤用の発音「**모**라요」/morayo/ ;
모르다の해요体)

c) 불아요/bureoyo/ (連音化した実際の発音「**부**리요」/bureoyo/ ;
불다の해요体)

c-1) 불리요/bulleoyo/ (音声的誤用の発音「**부**리요」/bureoyo/ ;
부르다の해요体)

a)、b)、c)はリウル語幹の해요体であり、太字体の部分は連音化した正しい発音である。一方、a-1)、b-1)、c-1)は、/ㄷ/が連続するㄹ変則用言の해요体であり、太字体の部分が上記の表4のII(正用)の音声的誤用である。誤用において本来あるべき/ㄷ/の一つが脱落している。

それぞれのペアは、表記が酷似しており、うっかりすると、韓国語のネイティブ・スピーカーでも読み間違えてしまいそうなものである。よく見ると、両者の違いが分かるはずであるが、学習者はa-1)、b-1)、c-1)のㄹ変則用言の해요体を、a)、b)、c)のリウル語幹の해요体と同じものと見間違ってしまう。連音化と混同しているうちに、ㄹ変則用言の해요体が、連音化するものとして、学習者の脳裏にインプットされ、読み間違えを引き起こす。つまり、ㄹ変則用言の해요体は、連音化できないにもかかわらず、連音化できると思い込み、a-1)の「달라요/dallayo/」は「다라요/darayo/」、b-1)の「물라요/mollayo/」は「모라요/morayo/」、c-1)の「불리요/bulleoyo/」は「부리요/bureoyo/」と読んでしまうのである。この誤読の音声は定着化して、会話に現れる。両者の違いをはっきりさせるための対策が必要である。

この連音化の過剰一般化が要因で発生した誤用は、連音化の規則を、/ㄷ/が連続するㄷ変則의 ㄷ요体の発音にまで拡張して適用したことによる。言い換えれば、この誤用は、連音化の仕組み、すなわち終声/ㄷ/は初声「ㅇ」と結合する場合に限り連音化できる、という前提の未習得の結果だと言える。

5.4 調音の持続時間の短縮による誤用

以上では終声/ㄷ/の脱落を中心に考察をしてきたが、この項では初声/ㄷ/の脱落について検討する。誤用例は、本節の初めのところで示したが、再度、記載する。

실례합니다 (실례합니다 : 失礼します) /헛갈연요(헛갈려요 : 紛らわしい)

この初声/ㄷ/が脱落した音声的誤用は、上記の表1の①一年留学帰還者や③④の学習者に観察されるものである。韓国語母語話者が感じる違和感の度合いや発話の意味解釈に影響をするか否かという視点に基づくと、この誤用はむしろネイティブレベルに近づいたものと判断できる⁷。この音声は、韓国語の音韻対立の知識もあって、聞き分けはできるが、調音点と調音法などが適切ではないため、少々不自然さを感じさせる。その不自然さは、調音の持続時間の短縮と関係しているようである。つまり、/ㄷ/が連続すると、終声/ㄷ/は長子音[ɿ:]となるため、舌を硬口蓋につけたまま、少し時間を置くことが必要であるが、持続時間を持たず、早く舌を硬口蓋から離してしまった可能性がある。ただ、韓国語母語話者の中にも早口の人や滑舌の関係で、初声/ㄷ/を落として発音する人がいると思われるし、また調音の際に、終声/ㄷ/から初声/ㄷ/に移る時、少し舌から力を抜いたり、前舌と後舌といった母音の位置によって、音が不明瞭になったりすることもありうるため、日本人学習者には初声/ㄷ/が脱落した音として聞こえ、その音をモデルにして学習した結果である可能性も否定できない。

⁷ レベルをきちんと測定できる基準はないようであるが、この初声/ㄷ/が脱落した音声に対して、韓国語母語話者が違和感を強く覚えることはなく、また発話の意味解釈にもほとんど影響しない誤用（ローカルエラー）と見做すことができると考える。

5.5 流音化の未形成による誤用

この流音化の未形成による誤用は少し趣が異なるものである。流音化とは、下記の表5の例語の下線部ように/n//r/、または、/l//n/が連続する際、/n/がIのように/n/で発音されるのではなく、IIのように/l/で発音されることをいう。この流音化により、/ㄹ/が連続する音声となる。

表5

表記	I.誤用	II. 正用
①한류 (韓流 : /n//r/) 逆行同化	한류/한뉴	할류
②설날 (正月 : /l//n/) 順行同化	설날/서르나르	설랄

この流音化は、文字と発音のズレが大きいため、上級者でさえも正しく/l/化が出来ない場合が多い。①の場合、多くは、表記通りの音声「한류」[hanryu]にするか、/nn/化して「한뉴」と発音するか、どちらかである。②は表記通りの音声「설날」[seolnal]にするか、母音/ㄴ/を挿入して「서르나르」とするケースが頻出する。特に、①の逆行同化⁸は複雑で特殊なもの（有標）であるため、音声習得が困難となる。したがって、流音化という発音の規則を知らないか、または対応できない学習者達が誤用を起こすのである。この流音化による/ㄹ/の連続する言葉を正確に発音できる学習者はネイティブレベルだと言えよう。筆者が担当する上記の表1の③と④のクラスには、/n//r/の変化を知っていて、正用の音声「할류」[hallyu]と生成することが出来る学習者がいる。

以上で、子音/ㄹ/脱落を中心とした韓国語の構造に起因する誤用の実態を解明しつつ、その原因について論証をしてきた。続く節では、日本語の干渉による誤用について検討する。

⁸ 後の音が前の音に影響を与え、その音を後の音と同じ、もしくは近似の音に変化させる現象である。

6. 日本語の干渉による誤用とその原因

日本語の干渉には、下記のような母音の挿入と外来語における終声/ㄷ/の脱落がある。ちなみに、これらの誤用は、表1の個人レッスン欄にあるアメリカ人学習者からは確認されなかった。

(1) 母音の挿入の例

a. 母音/으/の挿入:시르례합니다 (실례합니다:失礼します) /

조르려요 (졸려요:眠い) /서르나르 (설날:お正月)

※流音化による発音は설랄)

b.母音/우/の挿入:시루례합니다 (실례합니다) /서루나루 (설날)

c.母音/오/の挿入:조로려요 (졸려요)

d.母音/이/の挿入:시리례합니다 (실례합니다)

(2) 外来語における終声/ㄷ/の脱落:이타리아 (이탈리아:イタリア) /

브로구 (블로그:ブログ) /코라 (콜라:コーラ) /

브라인도 (블라인드:ブラインド)

(1) と (2) の誤用も授業活動の際に、一度は耳にしていると思われる。(1) の母音を挿入した誤用には、/으//우//오//이/が入っている事例が観察された。具体的には、「실례합니다」の場合、母音/으/、/우/、/이/を挿入して、「시르례합니다」か、「시루례합니다」か、「시리례합니다」と発音する。そして、「졸려요」の場合は、母音/으/、ないし/오/を挿入して、「조르려요」「조로려요」と言う。これらの母音を付加する誤用は、前述の表1の学部1・2年次や社会人の初級クラスで繰り返し起こる。一方、(2) のケースは、韓国語の外来語において観察されるもので、中・上級者まで定着化する傾向が見られる。

まず、母音の挿入による誤用は、日本人の外国語に対する言語習慣、つまり、「카츄하츄니다(感謝します)」「키츄치」といった具合に子音の連続ができなくて、母音を挿入して読むことに起因するものと見做される。他方、外来語における終声/ㄷ/の脱落の現象は、過剰一般化の問題と関係する語形の記憶違い、または日本語

の外来語の読み方を韓国語の外来語にまで拡張して適用しているものと思われる。その背景には、①外来語まで韓国語にしなくてもよい、②特に日本で学習している場合、教師は日本式外来語を分かってくれると知っているので、韓国式を覚える努力をしないなどのことがあるかもしれない。いずれにしても、韓国語の語彙の中で、外来語の占める割合が年々増加していること（中島 2007 {p.435}）⁹や、音声的誤用は表記のミスに結びつくため、誤用に対する対応が必要である。

7. 誤用の弊害と対応法

さて、最後に整理しておくべき問題は、これらの誤用が学習者に何をもたらすかということである。結論を先に言うと、ここでも、誤用から学習者が受ける影響は、下記の表6のとおり、特に終声/ㄷ/の脱落の場合に大きい。発話の意味理解に支障をきたすものを中心に、具体例を幾つか提示する。

表6

I. 終声/ㄷ/の脱落による誤用例 (括弧の中が正用)	II. 誤用と同音異義語
① 타락하다 (탈락하다 : 脱落する)	타락하다 (墮落する)
② 노립니다 (놀립니다 : からかいます)	노립니다 (狙います)
③ 모래 (몰래 : こっそり)	모래(砂)/모래 (明後日)
④ 가래 (갈래 : 行く)	가래 (痰)
⑤ 다라요 (달라요 : 違います)	다라요 (달아요 : 甘いです)
⑥ 버리다 (벌리다 : 開ける/開く)	버리다 (捨てる)

上記の誤用例のように終声/ㄷ/が脱落すると、意味の違いに結びつくのである。①の場合、学習者は「脱落する」と言ったのに、相手は「墮落する」と理解してし

⁹ 中島 (2007)は、韓国語の語彙の中で外来語の占める割合は年々増加しているにも関わらず、日本での韓国語教育において、外来語に対する教育は遅れているという現状を踏まえて、韓国語の外来語に焦点を当てて、表記法の変遷、表記原則、日本語の表記、日本語の外来語表記との対応関係について論じている。

まうことになる。②は「からかいます」と伝えたのに、相手は「狙います」と受け取ってしまう。意味の取り違えが発生し、放ってはおけない問題である。しかも、アクセントが、右の言葉と類似している場合も多々あるので、指導する際に特に注意が必要である。

では、本稿の考察によって得られた知見にもとづいて、幾つかの対応法を挙げておきたい。まず、/ㄷ/が連続する際の誤用全体に対して、発音指導を行う際には、表6のようなデータを学習者に提示して、誤用に対する意識化を図ることを勧めたい。

第二に、正用の言葉にローマ字を施し、連続するリウル(Ⅳ)の存在に学習者の意識を向けさせるようにする。ローマ字表記は流音化の発音習得を促進させる効果が期待できる。

第三に、リウル語幹用言の変則活用のルールの過剰一般化による誤用に対しては、学習者の「消えるもの」「消さないといけないもの」という先入観を取り除くことが肝要である。リウル語幹用言を活用する際、表記においても、音声においても、終声「ㄷ」が完全に脱落するのは、語尾「—ㄷ니다/—세요/—오」と「—네요/—니까」のように/ㄷ/で始まる語尾、あるいは連体形を作る形態素「ㄷ (過去)」「는 (現在)」が付加される場合のみで、これら以外のケースで「ㄷ」を入れずに発音すると、音声的誤用に繋がると注意を促す。

第四に、ㄷ変則の誤形成による誤用は、ㄷ変則の正しい形成が大前提なので、5.2の表4のようなデータを用意して、[Ⅱ]のように終声の「ㄷ」をきちんと添加するところを、「Ⅲ」のように添加しないと、誤伝達に繋がると認識させる。表4の一部を再掲する。

基本形	I. 語幹	II. 해요体 (正用)	III. ㄷ変則の誤形成 (表記と音声)
마르다	마르	말라요	마라요

その上で、正しい音声にローマ字を施し、表記と音声において、/ㄷ/を脱落しないように注意を与える。

第五に、連音化規則の過剰一般化による誤用に対しては、連音化とはどういふも

のか、まず、しっかりと理解させ、ㄹ変則用言のㄱㅇ体との混同を是正することが重要である。本稿の5.3で提示した言語の最小対立（1単音のみの相違からなる対立）であるミニマルペア（最小対立をなす2語）を用いて、両者の語形に注意を向けさせ、その違いをはっきりと認識させる。ミニマルペアの使用は、連音化法則の定着にも、終声「ㄱ」が連続する際の発音指導にも、効果が期待できる。

第六に、韓国語の外来語における誤用については、外来語の語形が日本語と異なることを認識させるべきである。表記のミスは音声的誤用に繋がり、音声的誤用は表記のミスに結びつく。日本語の発音を持ち込まないように、一語一語の正確な形と発音を覚えさせることが肝要である。

8. おわりに

以上、/ㄱ/が連続する際に生じる誤用、すなわち子音/ㄱ/の脱落、もしくは母音挿入の要因を見つけ出し、要因の根幹にある原因を、「韓国語の構造」と「日本語の干渉」とに分けて検証し、その対応法を述べてきた。韓国語の構造による誤用は、①ㄱ語幹用言の活用規則の過剰一般化、②ㄹ変則用言のㄱㅇ体の誤形成、③連音化規則の過剰一般化、④調音の持続時間の短縮、⑤流音化の未形成の5点に起因していた。一方、日本語の干渉による誤用は、①母音の挿入と②外来語における終声/ㄱ/の脱落で、これらは、子音の連続を避け、間に母音を挿入して読むという日本人の言語習慣と、日本語の外来語の読み方を韓国語の外来語にまで拡張して適用していることに起因するものであった。特に、韓国語内の文法や発音規則の干渉に起因する誤用が多い点が注目されるが、その背景には、やはり、/ㄱ/の連続について学ぶべき内容の複雑さがあったと思われる。その複雑さが学習者の自然な音声習得を阻害していたと言えよう。

韓国語は発音が非常に難しい言語である。したがって、様々な工夫をめぐらして、根気よく発音指導をすべきである。限られた授業時間の中で、発音指導までには手が回らないのが現状ではあるが、限られた授業時間だからこそ、より効率的な発音指導法が必要なのである。本稿の対応法は、完全なものであるとは言えないが、/ㄱ/が連続する発音を習得する際の手助けとなれば、幸いである。

参考文献

- 趙義成 (2007) 「文字と発音の指導法」野間秀樹 (編) 『韓国語教育論講座』第 1 卷、くろしお出版 : pp.379-380
- 戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』第 7 卷 2 号、日本音声学会 : pp.70-83
- (2008a) 「日本語学習者の音声に関する問題点」『日本語教育と音声』第 2 章、くろしお出版 : pp.23-41
- (2009) 「日本語教育における学習者音声の研究と音声教育実践」『日本語教育』142 号、日本語教育学会 : pp.47-57
- 中島仁 (2007) 「外来語表記法をめぐって」野間秀樹 (編) 『韓国語教育論講座』第 1 卷、くろしお出版 : pp.435-461
- 西川寿美 (2005) 「母語の影響」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店 : pp.695-696
- 野間秀樹 (2007) 「音声学からの接近」野間秀樹 (編) 『韓国語教育論講座』第 1 卷、くろしお出版 : pp.221-255
- 迫田久美子 (2005) 「中間言語」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店 : pp.698-700
- 橋本学 (2006) 「第二言語学習者の誤用に関する分析を第二言語教育に活かすための予備的考察」『岩手大学人文社会科学部紀要』第 78 号 : pp.105-113
- 松崎寛 (1999) 「韓国語話者の日本語音声 — 音声教育研究の観点から—」『音声研究』第 3 卷第 3 号、日本音声学会 : pp.26-35
- 연세대학교 언어정보개발연구원(1999)『연세 한국어사전 初版3刷』(주)두산

(桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部非常勤講師)

samsun_ty@yahoo.co.jp

韓国語教育研究 第6号

ISSN 2186-2044

2016年 9月 10日 印刷

2016年 9月 15日 発行

発行 日本韓国語教育学会
〒577-8052 大阪府東大阪市小若江 3-4-1
近畿大学 国際学部 酒匂康裕 研究室気付
e-mail: jaklemejiro@gmail.com

編集 韓国語教育研究編集委員会
(委員長 /金世徳 kim@ashiya-u.ac.jp)

印刷 株式会社 仙台共同印刷
〒983-0035 宮城県仙台市宮城野区
日の出町二丁目 4-2
TEL 022 (236) 7161 (代) / FAX 022 (236) 7163